

2013年10月11日

AAAL2013 欧州自動車関連流通視察 報告書

- 企画／主催 オートアフターマーケット活性化連合（AAAL）
 ■旅行企画実施 近畿日本ツーリスト（株） ECG 営業本部 第2 営業支店

■期間／旅程 2013年9月20日（金）～9月27日（金） 8日間

1日目	9月20日（金）	成田出発	ドイツ フランクフルトへ
2日目	9月21日（土）	フランクフルト・モーターショー視察	
3日目	9月22日（日）	チェコ プラハへ移動	プラハ国立技術博物館視察
4日目	9月23日（月）	シュコダ工場・博物館視察	
5日目	9月24日（火）	イギリス ロンドンへ移動	プロドライブ視察
6日目	9月25日（水）	ウィリアムズ視察	ヘリテージ・モーター・センター視察
7日目	9月26日（木）	ロンドン市内視察後	成田へ
8日目	9月27日（金）	成田到着後解散	

■参加者（19名）

<敬称略>

①	経森 康弘	(株)オートボックスセブン	取締役 副社長執行役員	チェン副本部長
②	平山 和弘	(株)オートボックスセブン	部長	
③	大橋 正敏	(株)タクティ	取締役	
④	池川 寛	コアーズインターナショナル(株)	代表取締役社長	
⑤	住野 泰士	(株)オートボックスフィナンシャルサービス	代表取締役会長	
⑥	西脇 保彦	(株)ボンフォーム	代表取締役社長	
⑦	鈴木 弘一	(株)カーメイト	取締役 専務執行役員	
⑧	白神 博	(株)クレトム	代表取締役	
⑨	田邊 貴幸	(株)セイワ	専務取締役	
⑩	米澤 美樹雄	錦産業(株)	常務取締役	
⑪	東山 克基	(株)ミラリード	代表取締役社長	
⑫	棚橋 公三	エステーオート(株)	代表取締役社長	
⑬	柏木 信哉	(株)プロスタッフ	取締役 営業部 本部長	
⑭	淵田 昌嗣	武蔵ホルト(株)	社長執行役員	
⑮	田中 毅	(株)ワーク	代表取締役	
⑯	高瀬 峰雄	ブリッド(株)	代表取締役	
⑰	人見 隆作	(株)エイチ・ピー・アイ	代表取締役	
⑱	植草 正拓	日本自動車用品・部品アフターマーケット振興会	事務局長	
⑲	中小路俊康	自動車用品小売業協会	事業推進部長	
（添乗員 近畿日本ツーリスト 宮城和加子）				

—— 9月21日（土） IAA2013 フランクフルト・モーターショー視察 ——

<モーターショー概要>

- ・会 期 2013年9月10日（火）～22日（日） 13日間
- ・開催地 ドイツ フランクフルト
- ・会 場 フランクフルト見本市会場（Messe Frankfurt）
- ・入 場 料 137.5ユーロ（3日間入場券）

フランクフルト・モーターショーは、ドイツのフランクフルトで奇数年に開催される世界最大のモーターショーである。正式名称である国際モーターショー（Internationale Automobil-Ausstellung）の頭文字をとって IAA と呼ばれ、主催はドイツ自動車工業会（VDA）となっている。

今回のショーでも国産車勢の日産『インフィニティ Q30 コンセプト』、トヨタ『レクサス LF-NX』、『ヤリス ハイブリッド R コンセプト』、ホンダ『シビック ツアラー』やスズキのコンセプトカー『iV-4』、海外勢のメルセデス『コンセプト S クラスクーペ』、『GLA クラス』、VW『e-ゴルフ』、アウディ『ナヌーク クワトロ コンセプト』、『新型 A3 カブリオレ』、BMW『i8』、スマート『four joy』、ルノー『新型メガヌ』、シトロエン『グランド C4 ピカソ』、プジョー『308 コンセプト』、『208 ハイブリッド FE コンセプト』、フェラーリ『458 スペチアール』、ジャガー『C-X17』といった多くのワールドプレミアが展示されていた。

また、多くの自動車メーカーの展示車両は、エンジンのダウンサイジング化（小排気量ガソリンターボ）、ヨーロッパ車のおよそ6割を占めるディーゼルエンジンをはじめ EV、HV、PHV（コンセプトカー）といった環境対応型のパワートレインを搭載する車が主流となっている。さらにもう一つ今回自動車メーカーが注力しているのが新興国での需要が見込め収益性も高いという理由から、小型高級車市場であると聞いている。

我々が訪れたのは、期間最後の週末土曜日ということで入場者数も非常に多く、一部の展示ホールでは入場制限が行われるほどであった。中でも地元ドイツの自動車メーカーは、広大なブースを展開。自国ブランドということなのか人気も高く、足の踏み場もないほどのにぎわいを見せていた。今年は東京モーターショーの開催年、この流れがどのように日本に影響を及ぼすのか楽しみである。



IAA2013 フランクフルトモーターショー会場にて



今回入場パスの手配をいただいたポッシュブースにて、同社が取り扱う部品の説明を受ける参加者



ワールドプレミアの1台「458 イタリア」の高性能仕様
フェラーリ『458 スペチアーレ』 ポルシェ、ランボルギーニといったスポーツカー展示ブースはどこも黒山の人だかり



自動車メーカーでのホイールの差別化を謳う展示
(ブジョーブースにて)



日本国内と同様にブルーを基調にハイブリッドを前面に
打ち出したトヨタブース



頭上を車が走り抜ける BMW ブース



日本国内ではまず見ることのないルーマニアの自動車メーカー
ルノーグループのダチア



スバルブースにて、元祖国民エコカー「スバル 360」

—— 9月22日（日）プラハ国立技術博物館視察 ——

2011年にリニューアルオープンした施設。1階の広大なホールには、貴重なレーシングカーや自国の自動車メーカーを中心とした新旧のクルマのみならず機関車や英国スピットファイヤー戦闘機といった『乗り物達』が所狭しと鎮座、更に高い吹き抜け部分には複葉機、グライダー、大戦時代の戦闘機、ヘリコプターなどが展示されており入館した瞬間から来場者を圧倒する迫力である。

このフロアを囲むように、壁際に沿って3層の展示スペースがあり、下からモーターサイクル、船舶関連及び航空機等の各種エンジン、最上段が自転車といった展示内容で、その数は5,500点にも及ぶという。

そのほか、別室には特別コーナーが設けられており、訪問時にはTV放映に関する機材等の歴史についての展示が行われていた。

日本からの来場者は非常に少ないと聞かすが、旧東ヨーロッパ圏に於ける工業技術の歴史と進歩を自動車関連だけでなく航空機、機関車など時代を追って見学することができ、当時のヨーロッパ最前線の技術とデザインを駆使した逸品の数々を十二分に堪能することができた。



プラハ国立技術博物館前にて



1階フロア展示 英国スピットファイヤー



吹き抜け部分展示



リアの流線デザインと3灯ヘッドランプが特徴的な
1937年式 タトラ 77a (チェコ)



世界的にも貴重なモデル 1931年式 ブガッティ51
(フランス)



一般的にモーターサイクルが認知されているヤワ (JAWA)
の1935年式 750



1964年式 シュコダ フェリーシアスーパー
オープンモデル



並列4気筒エンジンを搭載する1931年式インディアン4と伝統のVツインエンジンを搭載する1926年式HD (米国)



チェコ製モーターサイクル ヤワ (JAWA) の歴代モデルが
並ぶ2階フロア (1931年式 500 cc OHV モデル)



各種エンジンのディスプレイ (一部カットモデル)

— 9月23日（月）SKODA（シュコダ）博物館・自動車工場視察 —

シュコダ自動車の歴史は長く、1895年に自動車愛好家であった技師ヴァーツラフ・ラウリンと本屋ヴァーツラフ・クレメントが設立した自転車メーカー「ラウリン&クレメント」社がその起源。
その後、自転車にエンジンを取り付けたモーターサイクルから本格的なモーターサイクルの生産を行うようになり、その収益で自動車の生産に取り組み、紆余曲折の末、現在の社名であるシュコダとなり1991年にVWグループの傘下に入り現在に至る。今回の視察先となるシュコダ自動車はチェコのムラダー・ボレスラフ村にその本拠地を置く。

日本国内では馴染の薄い自動車メーカーということもあり、工場視察の前にシュコダの歴史を知るべく、まずは併設されている自動車博物館の視察を行った。館内には綺麗に仕上げられた各種年代の車および起業時のエンジン付き自転車が展示されている。
なお、展示車両のレストア作業も同社が行い、それらの完成までの作業工程について実際の車両を使った展示も行われていた。
現在では大衆車としてのカラーが強い同社ではあるが、過去にはプレミアムカーも手掛けるなど、初めて知ることも多く非常に興味深いものだった。
また、ラリー等のモータースポーツに関する取組みの歴史も長く、過去の貴重なモデルたちも見ることができたことが大きな収穫である。

その後、シュコダ自動車の部品製造及び組み立て工場を視察した。シュコダ社は旧東ヨーロッパ圏の中でも高い技術力を誇る自動車メーカーで今回は部品の製造から組み立てラインまで行っている広大な工場内を廻り、広報担当のガイドにより詳しく説明を聞いた。
特に、一般的に他の自動車工場では、金型等の機密保持のために公開されないプレスラインについても視察することができたことは驚きである。ここで働く工員の平均年齢は約27歳と若く、組み立てラインでは女性の姿が目立った。
また、日本の工場と比較すると工員の人数が多く、手作業に委ねる部分が多いと感じた。
なお、シュコダ自動車は年間94万台が生産されており、約94%が他の国へ輸出されているほか、国内シェアは、年々下降気味で現在約32%とのこと。 ※工場は撮影禁止の為画像無し



シュコダ ミュージアム前にて



シュコダ ミュージアムにて説明を受ける参加者



「ラウリン&クレメント」からシュコダまでのエンブレムの変遷



かつて京都に納められた当時の写真も展示



威風堂々1940年式 スーパー4000タイプ919



創始者ヴァーツラフ・ラウリンと
ヴァーツラフ・クレメントの像



創業当初の自転車とエンジン付き自転車



2003年式WRCマシンと1984年式ラリーカー



レストアの過程を実車を用いて展示説明

—— 9月24日（火）プロドライブ視察 ——

プロドライブ社は、1981年のWRCチャンピオンであるアリ・バタネンのコ・ドライバーであったデビッド・リチャーズが1984年にわずか4名でスタートした。その後、高い技術力により5つのWRCチャンピオン、5度にわたるBTCCチャンピオンをはじめ、各種タイトルを獲得する。現在では世界を代表するファクトリーとなっており、ラリーやレースで培った沢山のノウハウを背景とした最新の技術開発力は、モータースポーツ業界はもちろんのこと、世界中の自動車業界にも大きな影響を与えるに至っている。

現在、同社はモータースポーツ活動を軸に、エンジンやトランスミッション、シャシー、エレクトロニクスなどの研究開発・コンサルティングを行うほか、オリジナルの公道用向けパーツやレース車両等の生産・販売なども行っている。

本社は、F1やWRCをはじめとする国際レースで走るマシンの75%が作られるという3,000社もの専門企業が存在するイギリスモータースポーツの中心地「モータースポーツヴァレー」にある。

まずは、アストンマーチン、ポルシェ、フェラーリ、スバルといった歴代のレーシングマシンが展示されたコレクションホールを、その後ボディワーク、エンジン、電装関係といった実際に作業を行っているファクトリー部門の視察を行った。BMW ミニのラリーカーやアストンマーチンのレースカーの配線製作に1名が2週間掛けて行うほか、エンジン部品であるクランク、クランクシャフト、コンロッド、足回りのアッパー&ロアアームの加工など一品一品を熟練の作業員が時間を掛けて手作業で行う。一分一秒を争うモータースポーツならではの世界を垣間見た。



社屋前にて



プロドライブ社 社屋全景



同社の主力モデルの1台となっているアストンマーチン



1984年式 ロスマンズカラーの911SC RS ラリーカー



2000年式 WRCマシン スバルインプレッサ



珍しいMGメトロのミッドシップラリーカー



フォーミュラーも手掛ける 2004年式 BAR060



ボディワークセクションでは自動車メーカーから提供されたホワイトボディにロールゲージやスポット増しといった補強加工が施される



同社のマシンで活躍した多くのドライバーの写真が飾られていた中、日本人ドライバー新井敏弘選手の若き日の写真も

—— 9月25日（水）ウィリアムズ視察 ——

ウィリアムズはF1のレーシングチームで1977年にフランク・ウィリアムズとパトリック・ヘッドにより設立され、正式名称はウィリアムズ・グランプリ・エンジニアリング、英国内で最も成功したコンストラクターの一つに数えられる。

その前進は1966年にフランク・ウィリアムズにより設立されたフランク・ウィリアムズ・レーシングカーズになる。

創立者兼マネージャーであるウィリアムズは、1986年の交通事故により下半身麻痺となり車椅子生活となったことから「車椅子の闘将」のニックネームで呼ばれる。

また、彼は英国企業としての世界的な活躍が認められ勲章を授与されたほか、フランスからもルノーとの協力に対する功績が認められたことによる受勲者でもある。

ウィリアムズは過去、日本の自動車メーカーとも提携を行なっている。1984～1987年にはホンダがターボエンジンを供給、輝かしい成績をいくつも残している。また、1980年代は大手スポンサーであるキャノンカラーを纏ったマシンが深く記憶に残っている。

2007年～2009年トヨタと提携していた。トヨタよりエンジン供給を受け中嶋一貴がステアリングを握ったのも有名な話である。

近年では、2012年より15年ぶりにルノーがエンジンを供給、今シーズンもウィリアムズ・ルノーとして活動を行っている。また、2014年からはメルセデスからエンジン供給を受けることを発表している。

今回、訪れた施設は2フロアあり1階に歴代のフォーミュラーカーをメインに展示。同社が手がけた歴史的価値のあるレーシングマシンが綺麗に仕上げられ、年代別に並べられており、その展示方法も含めモータースポーツ愛好者にとっても素晴らしい空間となっている。

2階には優勝カップや歴代のドライバーのヘルメット等、貴重なコレクションの品々が数多く飾られている。鈴鹿F1時のカップも展示されており、実際に手に触れることが出来たのには驚いた。今回は専門のガイドのついた視察コースとなっており、終了後には売店でのグッズ販売までがセットになっている。コレクションの維持も含め、こういった部門も重要な収入源になっているのではないかと推測される。



館内エントランスにて



高速道路を降り、典型的な英国カントリーロードをしばらく走るとウィリアムズ社はある



その入り口、緑豊かな広大な敷地に同社は構える



歴代のマシンが綺麗に展示されている館内



各モデル（型式）が年代別に並ぶ



当時のドライバーの写真も飾られるなど分かり易い展示レイアウト



1980年代後期のホンダ製ターボエンジンを搭載したマシン スポンサーはキャノンもつとめる



2階フロアに展示されるカップやヘルメットの数々



当協会 JAWA 事業部会長企業であるレイズ社の F1 用ホイール（ウィリアムズ・トヨタ時代に採用）

—— 9月25日（水）ヘリテージ・モーター・センター視察 ——

ヘリテージ・モーター・センターは、英国のほぼ中央、ウォリックシャー州ゲイドンにある。ブリティッシュ・モーター・インダストリー・ヘリテージ・トラスト（BM I H T）によって運営されている。長い歴史を経てローバーグループへと統合・合併の道歩んだ各メーカーの記録や車両、その他の品々を収集、保存することを目的としてBM I H Tは設立されたとのこと。元来は1975年にレイランド・ヒストリック・ヴィークルズの設定によって誕生したが、後にBLヘリテージと名を替え、さらに1983年にBM I H Tとなり現在に至っている。

従来の自動車博物館とは全く異なり、大人から子供まで幅広い年齢層の来館者が楽しくかつ教育的に意義のある体験をすることが運営目的とあって、実際の入場者も老若男女とバラエティーに富んでいた。

交通博物館としては英国最大規模を誇り敷地は65エーカー（約79,560坪）。上から見ると車のタイヤ（ホイール）を模した円形となっているアル・デコ様式の建物内には1896年の創生期から今日に至るまでの英国自動車産業の発展を系統立てて物語る約350台の車を所有、その中から200台程度が常時展示されている。

英国車が一番輝いていた1950～1960年代を代表するMG、オースチン、モーリス、ランドローバー、ローバー、ウーズレー、ジャグア、ディムラー、ランチェスター、ロールスロイス、トライアンフ、ライレー、スタンダード、オースチン・ヒーレーのほか珍しいところでは、アルビオン、ソーニクロフト、トロージャン、レイランド等々の各モデルが数多く展示されており圧巻の様相。

また、映画に登場した車やF1、ル・マン24時間耐久レース、モンテカルロラリーなどのモータースポーツで活躍した車も多く展示されていた。

その他、車両やエンジンのカットモデルの展示、車に関連した時代を反映した映画の放映なども行なわれていた。

2007年に170万ポンドをかけて改築時に作られた中2階フロアには、アストンマーチンの特設コーナーがあり、特徴的なダブルバブル形状のルーフ、ボンネットを持つ生産台数僅か101台のV12ザガートモデルの展示もあった。

博物館外の敷地内では、専用のコースを走るランドローバー・オフロード試乗体験なども行なわれている。

かつて一世風靡した英国車の創生期、成長期、成熟期そして衰退期を知ることが出来る施設であった。





1960年代のトライアンフ・ヴィテスなど大衆車の展示が多い



王室で使われていた1968年式パンテンプラス・プリンセス



65年のモンテカルロラリーの優勝車1964年式モリス・ミニ・クーパーS



1950年代の貴重なMG社のレコードブレーカー達



モーガン社のスリーホイラー車 車輪の数によって課税額が異なる英国で誕生した



日本国内でもなじみの深いロータスヨーロッパとスパークセブン 手前はセブンの前身であるロータスMk6



MGB-GTのカットモデル



専門洋書に掲載されているMGA ツインカムのカットモデル

——最後に——

今回のツアーでは3カ国を回り、それぞれ自動車に関連した工場や施設6か所の視察を行った。特に東ヨーロッパであるチェコでのプラハ国立技術博物館とシュコダについては、どちらも日本人にとって非常に馴染の薄いものだっただけに新鮮に感じたというのが参加者からの多くの感想であったと思う。

また、最新鋭の技術の粋を集めた自動車達が並ぶ華やかなフランクフルト・モーターショーを見た後の英国ヘリテージ・モーター・センター視察は自動車産業の光と影を見た気がし感慨深いものであった。

とは言うものの、現代においても英国のモータースポーツ関連企業は世界的にもシェアも含めトップクラスであり、今回のプロドライブやウィリアムズを見ても世界規模でのマーケットを確立しており、そして活躍している。

どの視察先とも単純に日本との比較は出来ないと思うが、自動車に関わる仕事を行っている参加者にとって多くの収穫のあった1週間であった。

以上

日本自動車用品・部品アフターマーケット振興会（NAPAC）
事務局長 植草 正拓